

## 序 章 研究のねらいと方法

### 1 . 調査研究の視点

今年度は、一昨年度、昨年度の研究成果を踏まえ、「クルマに依存しない郊外生活」を実現するための具体的な提案を導きだした。

昨年度の研究は、一昨年 of 研究成果から得られた「クルマに依存しない郊外生活」を可能にするための3つの視点、新しい「システム」の導入、人々の「意識」をかえる、「まち」をどのようにつくるか、のなかでも、特に「まち」をどのようにつくるかに着目して研究をすすめ、開発時期の異なる3つの住宅地における、住宅地の道路や敷地の関係、特に道路幅員と各住宅区画が駐車場の設置を想定して供給されているかどうかによる、日常的な生活におけるクルマへの依存度、自身が居住する住宅地への関わり方、具体的には住宅地その周辺の施設の利用と認知度、日常的に好んで利用する街路についてアンケート調査を行った。その結果、クルマをもつことを積極的には想定せずに開発された住宅地では、その後に開発されたクルマをもつことを前提とし住宅地と比較すると、クルマに依存する生活を送る人の割合が高いことが明らかとなった。また、人々が好ましいと考える街路は、クルマで走りやすい道、人だけが利用することのできる遊歩道の二極に分化しており、生活を行うために必要な行動はほとんどクルマに依存して行われるのに対し、歩くといく行為は、他の目的を伴わず、「散歩」、「ウォーキング」といった歩くことそのものを目的に行われていることが明らかとなった。さらに、クルマに依存せずに自転車や歩くことで日常生活を営む人々は、地域の施設に対する認知度が高いが、クルマに依存する人々は低いことも明らかとなった。

そこで、本年度の研究テーマを「歩いて暮らせる住宅地の提案」と定め、学生を主体としたワークショップを居住者の意見を取り入れながら行うことにより、

- 1 . 具体的な「歩いて暮らせる住宅地」に向けた住宅地の改変計画の提案
  - 2 . 提案作成過程を、居住者に知らせることによる居住者の意識の向上
- の、2点为目标とし、まちづくり手法の確立を目的とした研究を行った。

本研究では、一般家庭の自家用車を表す言葉として「クルマ」を用いることとする。

### 2 . 調査研究の方法

本年度は、大阪大学大学院工学研究科に所属する2名の研究者と関西大学工学部建築学科に所属する1名の研究者を委員とし、関西大学工学部建築学科建築環境デザイン研究室の5人の学生をまじえて研究会を組織した。

提案の対象とした住宅地は、箕面市の国道171号より北に位置する阪急電鉄により供給された、外院の里、外院南の一塊となった住宅地である。

今回行った手法は、

- (1) 学生による住宅地プレ調査
- (2) 居住者と学生による、クルマに依存しない郊外住宅地提案のための第1回ワーク

### ショップの開催

- ( 3 ) 学生による住宅地調査による住宅地案内図の作成と住宅地改変提案の作成
- ( 4 ) 外院南、外院の里の全戸への住宅地案内図の配布と第 2 回ワークショップの告知
- ( 5 ) 居住者と学生による第 2 回ワークショップの開催
- ( 6 ) 学生による住宅地改変提案( 修正版 ) の作成
- ( 7 ) 外院南、外院の里の全戸への住宅地改変提案図の配布を行った。

委員とワーキンググループのメンバーを以下に示す。

#### 委員メンバー

- 小浦 久子( 大阪大学大学院工学研究科助教授 )
- 松村 暢彦( 大阪大学大学院工学研究科助教授 )
- 岡 絵理子( 関西大学工学部専任講師 )

#### ワーキンググループメンバー

- 西野 奈那( 関西大学工学部建築学科博士後期課程 1 年 )
- 福本 優 ( 関西大学工学部建築学科 4 回生 )
- 林 優也 ( 関西大学工学部建築学科 4 回生 )
- 後岡 理沙( 関西大学工学部建築学科 4 回生 )
- 勝川 恵子( 関西大学工学部建築学科 4 回生 )

研究会の開催スケジュールは、以下のようであった。

- 第 1 回 ワークショップ 10 月 22 日
- 第 2 回 ワークショップ 1 月 13 日